

# トコブシ資源状況回復調査

團 昭紀・吉見圭一郎・山本 浩二\*・岡崎 孝博\*

本県海部沿岸で平成7年8月初旬を中心に発生した *Gymnodinium mikimotoi* による赤潮被害を受けたトコブシ資源についてその回復状況を調査し、資源回復手法を検討した。

平成9年12月19日に、水深2mで初めてトコブシが確認された。赤潮被害後1年4ヶ月後までは水深2mでは生息が確認されていないが、逆に水深10mにも生息がみられた。一方、水深2mまで分布が回復した平成9

## 調査方法

### 1. 水深別生息数調査

トコブシ休漁期間中の冬季に毎年1回、水深別のトコブシ生息数を把握するため、牟岐町手羽島西側の通称「オオイシ」で潜水調査を実施している。本年度は、平成12年3月8日に実施した。採取水深は、2, 4, 6, 8, 10mの5層を設定し、各層とも1m方形枠3箇所のトコブシを採取し、殻長等を測定し調査水域へ再放流した。

### 2. 試験漁獲調査

7月と3月の年2回、牟岐町小津島北端の通称「サデバノシラギ」で試験漁獲を実施している。本年度は平成11年7月1日と平成12年3月1日に実施した。調査方法は10人のダイバーが30分間に調査場所で素潜りによるトコブシの再捕を行い、船上にて殻長測定を行い、その後、再捕貝を同じ場所に再放流した。なお、人工種苗由来のグリーンマークの貝もあわせて確認した。

### 3. 放流適地調査

資源回復手法として、人工種苗の放流を検討するため、放流適地の検討を行うため、トコブシ漁場と天然稚貝の生息地の調査を平成12年3月1日～3月8日に牟岐地区で行い、海底地形、海藻植生及び採取トコブシの殻長組成の比較を行った。

## 結果及び考察

水深別生息調査：図1に平成7, 8, 9, 11年度の牟岐町手羽島「オオイシ」における水深別の1㎡当たりのトコブシ採取数を示した。赤潮被害約1年4ヶ月後の平成8年12月4日まで、水深2mでトコブシは確認されていない。その後、赤潮被害約2年4ヶ月後の

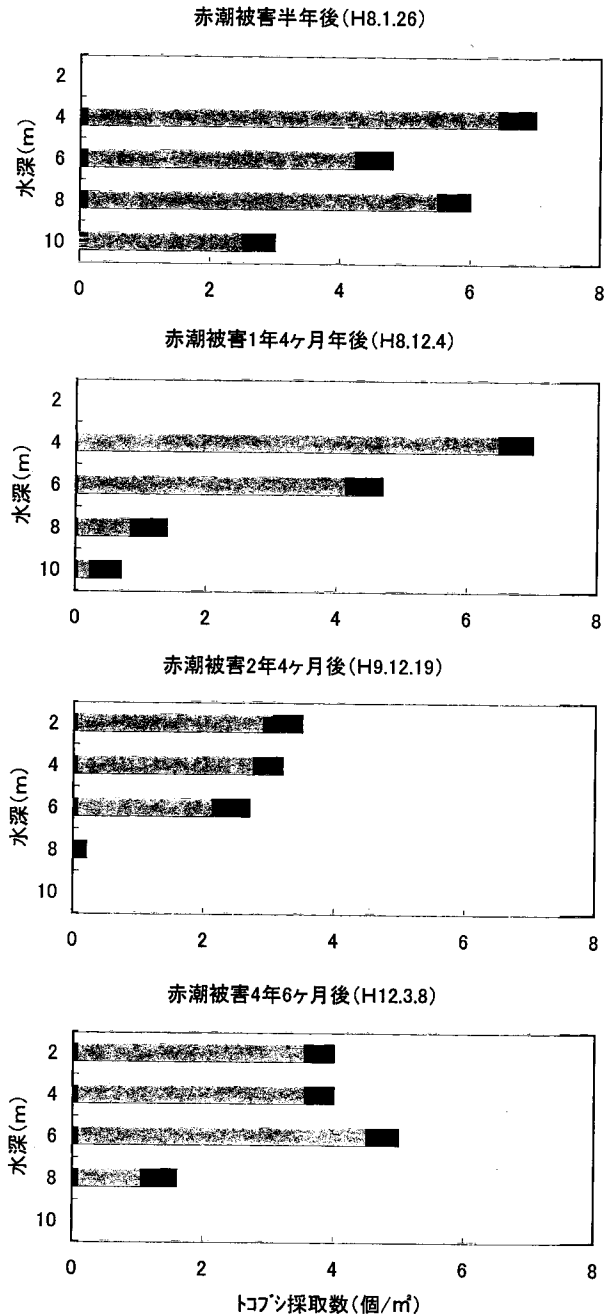


図1 手羽島西オオイシにおける水深別トコブシ生息数調査

\*：徳島県水産課

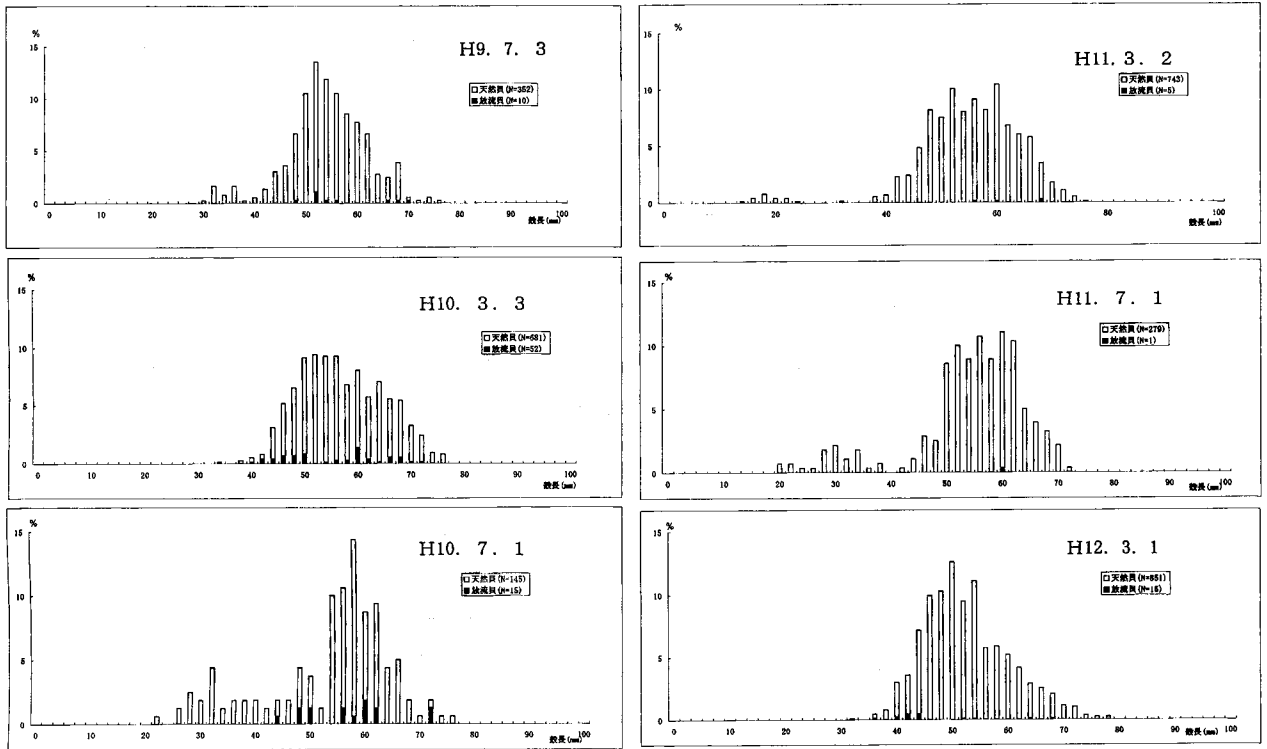


図2 試験漁獲調査

年12月以降は、水深10mでの採取は無くなった。トコブシは4～8mの範囲の水深が生息密度が高く、水深が深くなると密度が下がると言われている。平成9年以降の分布が正常であり赤潮被害直後の分布は、深い方へ移動したための分布であったと考えられた。いずれにしても、水深別の分布からみて赤潮被害後の正常な状態にもどるのは、2年程度必要であることがわかった。

試験漁獲調査：図2に各年度における試験漁獲の殻長組成を示した。赤潮被害2年後の平成9年7月の調査から平成12年3月までの調査で、順調な再生産が行われていることが分かった。平成10年7月までの調査では、人工種苗の混獲率は3～10%と高く、その後減少している。

放流適地調査：小津島周辺のトコブシ漁場である通称「サデバノシラギ」と稚貝の生息場と考えられる古牟岐地先の通称「小島の浜」での試験漁獲を実施した。地形等の特徴は、「サデバノシラギ」では水深4～6mの海底に人頭大の転石があり、海藻植生としてはマクサ類が優占していた。一方、「小島の浜」では、水深3～4mの砂地（細砂）の海底に、直径20～50cmの転石があり、転石には大型海藻がほとんど見られず、

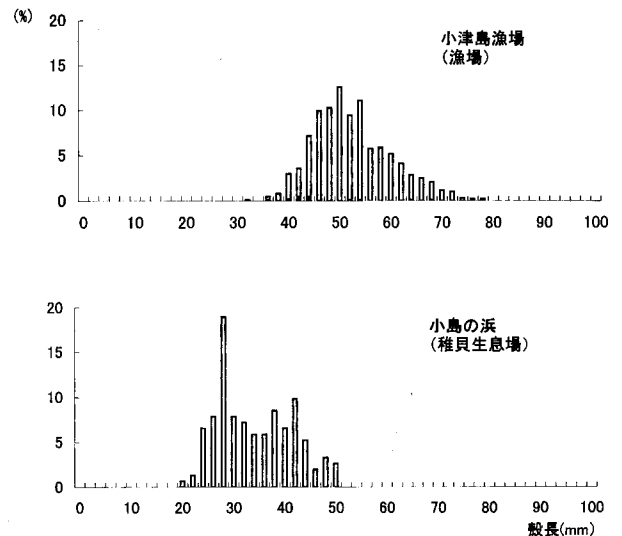


図3 トコブシ漁場と稚貝生息場の殻長組成

無節石灰藻で被われていた。図3に漁場と稚貝生息場のトコブシ殻長組成を示した。漁場では、殻長50mm付近が最も多く、稚貝生息場では30～40mmが多かった。稚貝生息場では、前年発生群と成長の遅れた1+歳群が混在していると推定された。今後、調査回数を増やし稚貝がどの様に加わり、分散してゆくのか把握する必要がある。